

## II 博物館事業の概要

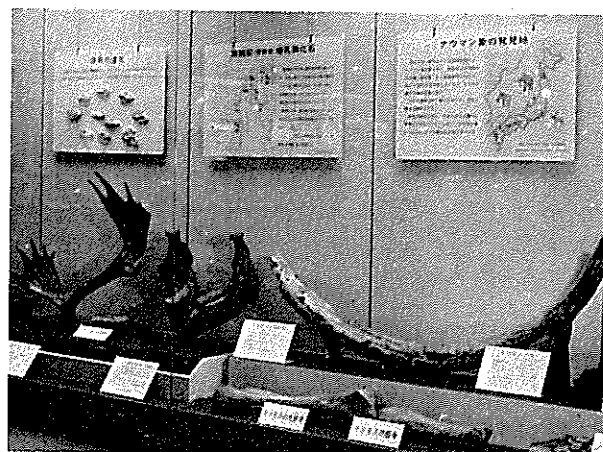
常設展示を構成する資料表

区 分	現物標本類	ジオラマ 機器模型類	カラー透視写真 および写真	図 板	計
地 学	655	22	13	28	718
生 物	1,183	5	31	37	1,256
考 古	551	3	6	22	582
民 俗	211	—	16	17	244
美 術	29			1	30
史 料	67		4	1	72
計	2,696	30	70	106	2,902

### 1. 常 設 展

#### (1) 地学展示室

鳥取県地方の生いたちを岩石や化石などの標本と各種の模型、カラー透視写真の併用によって解説した。具体的には鳥取県の土台となっている約3億年前の岩石から、数万年前の大山の火山活動に至るまでの県内の地質時代の出来ごとを日本列島の形成と関連づけて、各種の標本と岩石顕微鏡投影装置や写真などによって興味をもたれるよう配慮して展示した。一方、県全体の地形や地質は模型によって表現し、特に地質については地下の構造が理解されるよう電動式によって断面を表わした。



哺乳類化石、ナウマン象の牙など

特殊な地形として山陰沖の海底地形、吉岡付近の河川争奪地形、人形峠のウラン鉱床地形地質などの模型を配置した。

化石はコレニヤと呼ばれる20億年以上も昔の化石から古生中生代および新生代の順に代表的なものを選定した。本県では古・中生代の化石は産出しないが基本的な資料として特に重要と考えられる三葉虫をはじめアンモナイト、シダなどの化石約50点を展示した。県産の新生代化石は化石を産出する地質の分布や層序と関連づけ、さらに隣県の状態にも触れた。

大型の化石として日本海底で採集されたナウマン象の牙は注目される資料である。この時代の哺乳類化石としてオオツノジカやマンモス象の骨格の一部をも陳列した。

鉱物は結晶形や集合形の特性の解説展示と並行して化学組成による分類展示を行なったが、県産のものは出来るだけ取り上げながら基本的な鉱物はすべて網らるように心掛けた。例えば日本特産ともいえる輝安鉱の結晶形標本もある。また大型の鉱物として重さ150キロの水晶や「ひすい」などの裸展示は驚異的として観客に注目されている。有用鉱物としては、若干の鉱石をも加えながら県内の鉱床や鉱山にも触れた。

温泉県にふさわしい資料を展示するため、鳥取温泉のボーリーグ・コア(地下260メートル)や温泉の湧出機構を電動的に表現した模式模型を製作し、温泉を動的に取り上げた展示として注目されている。

ウラン鉱とこれに関連する展示としては各種放射性鉱物標本と放射能の測定実験や燐灰ウラン鉱をはじめとする蛍光鉱物の発光実験装置を導入して興味をもたれるよう配慮した。

砂丘は、地質断面や地質模型などによって、その生成をも考えられるよう展示を構成した。

## (2) 生物展示室

この展示室のポイントは、中国山地の代表的生物相をとらえるために構成したジオラマである。ここでは、タヌキ、イノシシ、テンなどの動物やシラカシ、ツバキ、ダンコウバイなどの標高 400m 付近の山地でみかける植物を自然の環境そのままに再現した。

次に、重点を置いたのは、両生類コーナーの特別天然記念物オオサンショウウオである。

岡山県真庭郡湯原の故水島勇氏が50年にわたって飼育研究された、生育過程を示す標本は、世界的価値のあるものである。水槽には、生態観察のため、2匹のオオサンショウウオを飼育展示した。

一方、大山、砂丘のコーナーでは、生活環境と生物の生き方に視点をしぼり、垂直分布、水平分布を中心に実物、模型、写真などを組み合わせて、生物の環境に対する適応性を解説した。

本県に対する珍しい生物としては、昭和 8 年鳥取市の久松山で発見され、一躍世界の蝶学会の注目を浴びたヒサマツミドリシジミや、日本最初の蝶の天然記念物として、久松山の生息地が指定を受けたキマダラルリツバメを展示した。これに加えて、かつて本県で捕獲された標本で、今後再び入手することが困難と考えられるクロヅル、コウノトリ、オットセイなども貴重標本として配置した。

植物は三枚のパネルに、県下に産する代表的なシダ植物や、海藻、帰化植物を組み込んだ、特に帰化植物は、「招かれざる客」として社会の関心をたかめつゝあるものが多く、この点を十分考慮した。

この他、水産コーナーでは、魚貝類、エビ、カニ類、軟体動物の中で、珍しいもの、美しいもの、県民になじみ深いものを選んで展示した。

鳥類のコーナーは、県下の山野、湖沼の野鳥を生息環境により分類し、渡り鳥についても解説を加えた。さらに、野鳥に対する親しみと関心をより深めるため、テレビ型ボックスに、平地、森林、湖沼、高山などの野鳥19種の鳴き声と生態写真をセットし、耳と目で学ぶ環境を設定した。

また、きのこ、こけ類などをレプリカによって展示して形態が立体的に把握できるように考慮した。さらに多数の樹幹標本の中で樹令 200年以上を数えるスギ・トチ・ブナなどの横断面を示し、年輪による生長の観察を容易にした。

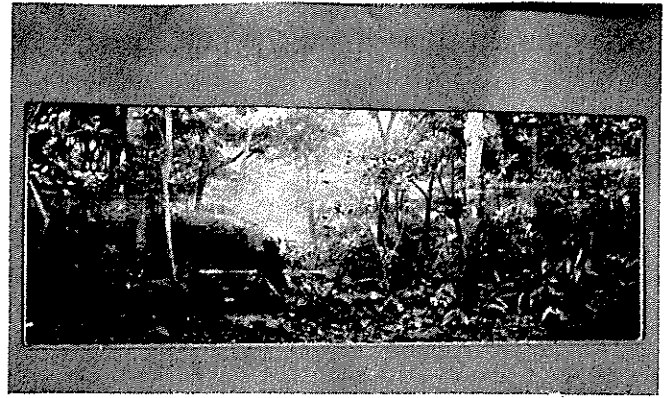
## (3) 考古展示

鳥取県内の縄文時代から奈良・平安時代までの生活様式の変遷と文化の発展を実物・模型・写真・解説図版などを用いて構成し展示した。

縄文時代では、土器・石製品（石皿・石斧・石七・石鏃・石棒など）・骨角製品（釣針・もり・やすなど）などをその用途や働きによって生活用具、土・木用具、狩猟・漁労用具、呪術・装身具などに分けて展示すると共に土器の器形や文様によって早期から晩期まで5期に分けて編年し展示した。

また、遺物の種類や使用法、遺跡の分布などについては解説図版によって説明している。

弥生時代では、土器（壺・かめ・こしき・高杯など）・石製品（石くわ・石庖丁・石斧・石のみ・石錘など）・土製品（分銅型土製品）などをその用途や働きによって生活用具、耕作・収穫用具、木工用具・漁労用具・呪術・装身具などに分けて展示すると共に土器の器形や文様によって前期・中期・後期の3期に分けて編年して展示し、



中国山地の生物のジオラマ



古墳出土品

その中に金属製品として銅鐸・銅剣をも加えた。さらに遺跡の分布や農耕のようすなど解説図版による説明も行った。

古墳時代では、国分寺古墳、古郡家1号古墳、宗像1号古墳などの出土品の展示や解説図版によって時期による古墳や副葬品のちがいを説明し、橋津4号古墳や三明寺古墳の模型、壺棺、陶棺などの展示で古墳時代の埋葬の方法を説明している。また、木製品（田下駄・すき・火きりうすなど）や鉄製品（くわ・鎌・やりがんな・鉄斧・刀子など）・土師器（壺・かめ・こしき・かまなど）などの展示で庶民の生活や土師器の用途を紹介した。

その他、手持高坏・長頸壺・装飾器台など各種の須恵器や器形による時期的変化、武器（直刀・剣・鉄鏃など）、鏡（三角縁神獣鏡など）、馬具（馬鐸・杏葉・鏡板など）、装飾品（勾玉・管玉・石釧など）などの古墳副葬品や鹿・人物・鳥・家など県内出土の各種の埴輪も展示した。

奈良時代では、古廃寺出土の軒丸瓦や塑像など県内各地遺物を展示すると共に解説図版によってその分布を説明した。さらに、平安時代では、経塚出土の経筒や和鏡・瓦経などの展示をし、解説図版によって埋経文化を説明した。

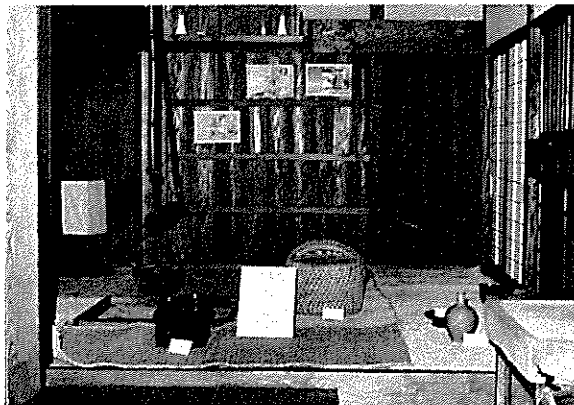
古代の窓では、伯耆国分寺・同尼寺の発掘調査の概要を軒丸瓦や軒平瓦・鬼瓦・風鐸・仏具などの出土品や解説図版（各種の遺構や寺院配置など）によって紹介した。

その他、弥生時代の竪穴住居（倉吉市福庭遺跡）の復元模型、石馬（淀江町石馬谷古墳）の複製、瓦製鴟尾（国府町玉鉾）の復元複製や透視写真（青木遺跡・福市遺跡・土師百井廃寺・岩井廃寺・斉尾廃寺・泊出土銅鐸・伯耆一宮経塚出土金銅仏・大寺廃寺石製鴟尾）などによって県内各地の遺跡や遺物を紹介した。

#### (4) 民俗展示室

県内の資料を主とし、住居・生産・芸能娯楽・日用品・灯器・年中行事を重点にして構成した。

住居は当地方で江戸末期から明治時代にかけて盛んに建築された一般的な広間型農家の一部を設置し、家そのものを展示資料を容れるケースとみなし総合的な展示方法をとった。ただし既存の民家の移築、復元ではないので、屋内の展示も各地の資料を持ち寄って陳列した。内容的には、いろりの間を中心におモチの間、土間を設け、種々の食器や日用品・田臼、千歯等の農具類を展示した。特に千歯については、人形を配してその使用法と機能をみせることに意を用いた。



民家の一部「いろりの間」

生産コーナーでは、県内で古くから行なわれてきた生業の中から、青谷町夏泊の海女、佐治村の紙すき、弓浜半島の機織り、三朝町の木地挽きをとりあげた。ここでは、海辺から農、山村にかけての代表的な産業を抽出するとともに、それぞれ、東、中、西部の特徴的なものを拾いあげ、地域的にも偏しないよう心がけながら展示を構成した。展示方法は、一部を除きほとんどを裸展示とし、民俗にふさわしい形態をとるように努めた。実物資料の他に、海女ではその操業の様子を示すカラー透視写真と、全国的な海女の分布とその盛衰を図示した。製紙では、往年の和紙の製造工程が一目でわかる絵図板を掲げるとともに、展示資料の機能がそれによって理解できるように心掛けた。機織りでは、人形を配して作業の様子をみせ、同じく木地挽きもろくろの使用方法をカラー透視写真で示すなど、全体に展示資料のもつ機能を、なるべく直接的に理解できるよう考慮した。

芸能娯楽では、まず因幡地方に分布する祭礼のきりん獅子をとりあげ、その舞う姿を人形を使って立体的に構成した。

人形芝居では、同じく因幡に広く分布する座の中から、最も地方色の濃い鳥取市円通寺の人形ならびに鳴り物を選定して展示するとともに、座の分布を図示した。

郷土玩具は、主として江戸時代から明治時代にかけて製作、使用されたもの約30種を、縁起玩具と遊戯玩具に分

けて分類展示した。

主なものとしては、因幡の流しびな、岩井の挽物玩具、倉吉のはこた人形、鳥取の要造でこなどである。その他明治時代から大正時代にかけて、農民の間で人気を博した日野郡の影絵芝居の諸用具を展示した。この芸能娯楽コーナーは、他に比べ、最も地方色の強い資料で占められているといつてよい。

日用品コーナーでは、食器、化粧品、計量具その他の日用品に分け、当地方で代々引き継がれ、製作されてきた資料を展示した。主なものとしては、箱膳、お歯黒道具、炭火アイロン、きぬた、銭秤などである。すでに殆んどその使用が廃絶してしまった資料として価値があるものである。

灯器の展示では、資料を発生年代順に並べその発達過程が一目で分かるようにした。また電球を展示するなど、時代を大正までさげ教育的な面にも意を用い、別に総合的な灯器変遷の絵図板を掲げた。

この他、つのだる三種と行器（ほつかい）を展示した。いずれも結婚の際の祝儀用具で、ここでは往年の「たる入れ」の行事を解説し、人生儀礼の一端をとりあげた。

年中行事コーナーでは、春から夏、秋から冬にかけての季節展示を企画し、年二回入れかえ展示を行なっている。いずれも行事に使用された実物資料と行事内容を示すカラー透視写真で構成している。

### (5) 美術展示室

美術展示室は鳥取県の美術の歴史を一望できることを考え、本県にゆかりのある指定文化財、美術品を彫刻、絵画、工芸品などの分野別に、製作の時代も考慮して展示した。

しかし、本県の古美術品の大半は仏像、仏画などの仏教関係品で占められており展示の内容も仏教に関係深いものとなった。

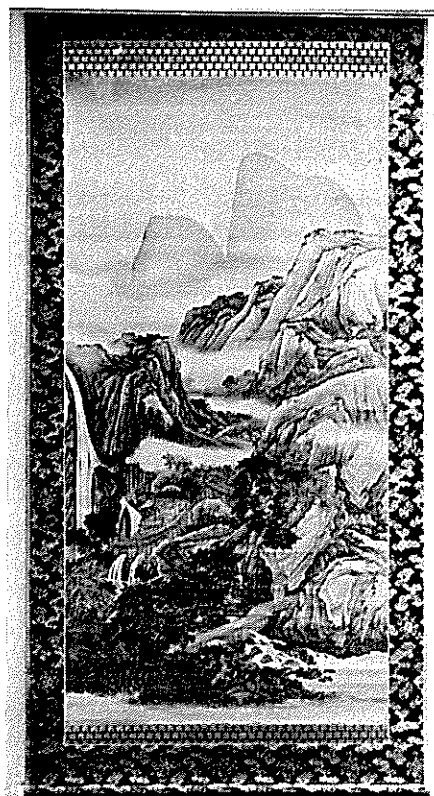
彫刻では重要文化財指定の観音寺千手観音像をはじめ三仏寺の蔵王権現像、長楽寺の毘沙門天像、学行院の吉祥天像、青竜寺の持国天像で、いずれも平安時代より鎌倉時代に製作された優れた仏像である。

絵画では鎌倉～室町時代以来各寺院で大般若会に祭られる仏画のほかに江戸時代藩絵師の筆になる大作、秀作をはじめ、本県出身画家の近代洋画も展示した。絵画は再三の展示替えを行って品質の保全に努めた。

工芸品では三仏寺所蔵の重要文化財花綵鸚鵡文鏡、本願寺の梵鐘、地藏院所蔵の保護文化財擬宝珠(二)、宗青磁香炉、清泉寺の鰐口をはじめ、藩御用窯因久山焼の陶器を展示した。

書蹟として保護文化財、加知弥神社の吉川元春祈願・寄進状・亀井茲矩の塩文書を展示した。

室の一隅に本県所在の国指定文化財の年表を掲げるほか、展示資料の由緒、概要、筆者の略歴、画風等を解説して鑑賞の手びきとした。



島田元旦筆 秋景山水図

#### 美術常設展示室 出品目録

	品名	時代	所有者	
◎	木造 蔵王権現立像	平安	三仏寺	(三朝町)
◎	〃 毘沙門天立像	〃	長楽寺	(日野町)
●	〃 胎蔵界大日如来座像	〃	永福寺	(若桜町)
◎	〃 千手観音立像	〃	観音寺	(大栄町)
◎	〃 吉祥天立像	〃	学行院	(国府町)
	〃 女神像	〃	三仏寺	(三朝町)
◎	〃 持国天立像	鎌倉	青竜寺	(郡家町)

	品名	時代	所有者
○ 鉄造	十一面観音立像	〃	加祥区 (西伯町)
○ 〃	聖観音立像	〃	( 〃 )
●	和蘭陀写水指	江戸	河田 一 (河原町)
●	青磁香炉	宋	地藏院 (関金町)
● 銅製	擬宝珠 (二)	鎌倉	〃 ( 〃 )
◎ 〃	花綬鸚鵡文鏡	奈良	三仏寺 (三朝町)
● 〃	鱈口	室町	清泉寺 (国府町)
〃	梵鐘	平安	本願寺 (鳥取市)
●	吉川元春祈願状、寄進状	桃山	加知弥神社 (気高町)
●	塩文書	江戸	塩重世 (青谷町)
	ペルー浦賀来航図	〃	当館
	大山寺略図	江戸	当館
	釈迦十六善神像(三幅対)	鎌倉	永雲寺 (若桜町)
	般若十六善神像	〃	最勝寺 (河原町)
	般若十六善神像	室町	転法輪寺 (東伯町)
沖探容筆	八景図	江戸	
土方稻嶺筆	東方朔図(三幅対)	〃	
〃	芦間潜鯉図	〃	当館
島田元旦筆	秋景山水図	〃	〃
前田寛治作	立てる子供	現代	〃
〃	西洋婦人像	〃	〃
伊谷賢蔵作	立石山	〃	〃
〃	クスコの朝市	〃	〃

## (6) 史料展示室

史料部門の展示は、文書の展示が中心になる。所蔵資料の中心が藩政史料ということもあって、展示内容が専門的になりがちなため、一般観覧者に理解されにくい。

そこで、鳥取県近世史の中から一つのテーマを設置し、そのテーマにそった文書と解説を、展示することとしている。

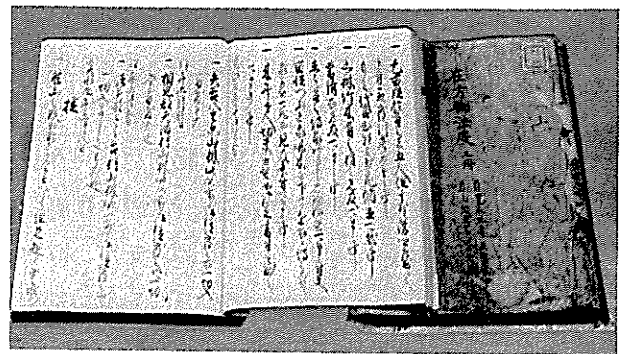
47年度は、開館記念ということもあって、収蔵資料の中核である鳥取池田家史料を中心に「藩政史料展」を実施した。

鳥取池田家史料は、約15,000点にもものぼるほう大な史料で、全国的にも貴重な大名家文書である。

「藩政史料展」は、所蔵史料の大綱と鳥取藩政の概要を理解してもらうために、史料を6つに分類し、その代表的な文書を5つのケースと壁面に展示した。

第1は鳥取藩の成立と藩主についての関係史料の展示である。「池田家履歴略記」・「徳川家綱領知判物写」・「徳川家光領知朱印状」及び12代藩主池田慶徳の幼少のころをしのぶものとして、その父徳川斉昭(水戸藩主)の書簡を展示した。

第2は家臣団関係の史料、とくに藩主との主従関係の基本となる史料を展示した。「組帳」・「御支配帳」・「二支配帳」は家臣団把握の根本の帳簿である。「藩士家譜」のうちより、荒木又右衛門、岡島正義関係を展示するとともに、岡島家に伝わる知行宛行状と知行目録及び「給人所付帳」を展示した。



鳥取藩資料 在方御法度

第3は藩政一般、とくに支配統治のしくみを示すための展示にした。先ず支配の概要を示すため「御家中御法度」「町方御法度」「同御定」、「在方御法度」、「同御定」という藩法集を展示した。次に、「万留帳」「万控帳」(家老の日記)、「御目付日記」「在方諸事控」「町奉行日記」を展示し、藩の支配機構を示した。

これらの日記では、元文一揆、享保一揆、宝永の大倉彦八の女敵討、堀庄次郎暗殺事件、佐橋火事の関係記事を解説展示した。

第4は明治維新と鳥取藩関係史料のうち、維新後も中央政府で活躍する河田佐久馬をとりあげその写真と家譜を展示した。

第5では文化史関係の展示で、藩政時代の代表的な著作のうち、「因幡民談記」、「因幡志」、「伯耆民談記」「伯耆志」、「鳥府志」、「因府録」の写本を展示した。これらは、藩政期に活躍した。藩内第1級の学者の著作であり、鳥取県地方史研究者必見の書である。

第6は絵図類の展示である。ケース内には、「権現祭行列絵図」2巻を展示した。この2巻の絵巻は、東照宮(樺谿神社)の祭礼行列を描いたもので、内容は「鳥府志」「因府録」に解説されている。

壁面には、「鳥取藩上屋敷正門図」を展示した。これは、幕末ごろに作られた泥絵であり、現存する唯一の大名屋敷として重要文化財に指定され、東京国立博物館に移築される以前の姿である。

さらに、年代の明らかなもので最古の鳥取城下の絵図として延宝8年の「鳥取城下絵図」を展示した。

このほかに藩政史を研究する人のため、江戸時代より廃藩置県に至る間の藩内の主な事件を年表にまとめて壁面に掛け、その下欄には当館蔵の諸日記類の薄冊名を掲げて索引の手びきとした。

## 2. 特 別 展

### (1) 当館主催

#### ア、郷土美術名作展(開館記念)

- 主 催 鳥取県、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館  
会 期 昭和47年10月1日(日)～10月22日(日)  
会 場 第1展示室(日本画)、第2展示室(洋画)  
第3展示室(日本画)、美術展示室(古代一中世)  
入館者 63,213人(有料)  
入館料 通常展の料金

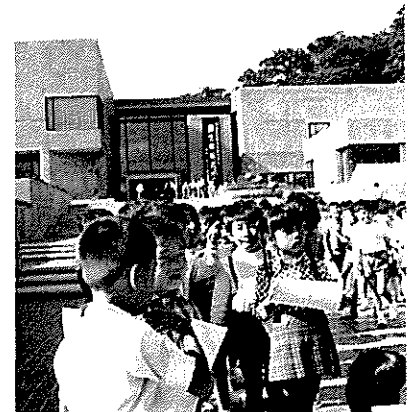
展示内容は、本県にゆかりのある指定文化財と近世の日本画、郷土出身の著名な近代物故作家の作品とし、東京国立博物館に寄託中の国宝、重要文化財と、県内に所在する重要文化財等を主とし、これに県指定、保護文化財をも加えて美術展示室(常設)に展示した。近世絵画は、稲嶺、稲臯、楊谷を特別第1展示室に、元旦、探容、一峨に文人画の樸斎を加え、さらに近代日本画の楯彦の作品を特別第3展示室に展示し、洋画は前田寛治、伊谷賢蔵、香田勝太の3人を特別第2展示室に展示した。

この「郷土美術名作展」には、白鳳時代の古い仏像から、昭和45年の伊谷賢蔵の死去まで約1300年にわたる長い年月の文化財、美術品等が一堂に集まり、国宝2件をはじめ、県内の国指定文化財のうちの半数が展示され、質、量共に本県では、最大の展覧会となった。又、前田寛治の「海」300号をはじめ各画家の代表作が、このように大量に集まったことも郷土ならこそその快挙であった。

第1室・第3室は、全部パネルを撤去して広々とした中で鑑賞できるようにし、第2室は、3人の作家の画風を生かしたパネルの配置などで鑑賞者の好評を得た。



国宝、普賢菩薩像



会場入口